

# 修士論文要旨

学籍番号 20GH105 第 号

氏名

趙 文軒

人文社会科学 専攻 (コース: 文化芸術)

## 論文題目

太宰治『人間失格』を読み直す——私小説とヒューマニズムを中心に——

太宰治は戦後、新戯作派、無頼派と呼ばれ、作家活動以外に、本人の乱れた私生活について広く知られる。創作活動については、古典文学や自身のファンの日記の手紙に取材するほか、自身の体験も多く下敷きにしており、多様な方法を用いた。太宰が心中自殺したことが影響して、このような作品の中においても『人間失格』は最も太宰本人と関わらせて論じられてきたものである。そうした態度が『人間失格』の読解における既定路線になったといえる。

次に、本論の構成を説明する。同時に本稿で取り上げる「私小説」と「ヒューマニズム」という二つのキーワードと読解の関係についても概略を述べる。

第一章では、「私小説」としての読み方が出てきた要因を考察する。この問題について、テキストの構造、創作内容と伝記的事実との重なりと差異、太宰の死をきっかけとした太宰の私生活に関するメディアの宣伝が大きな影響を与えたことという三点を挙げなければならない。

第二章では、「私小説」として読むことが妥当ではないことを論証する。その前提として私小説という語の問題点を挙げる。また、視点人物・大庭葉蔵、現実の小説家・太宰治、小説中に登場する小説家の「私」それぞれの関係を見ると、『人間失格』は視点人物と現実の小説家と小説中に登場する小説家の視点を統一する私小説の特徴に適合しない。最後に、テキストにおいて女性と男性のそれぞれからなされた葉蔵に対する評価が二項対立を形成していることを明らかにできたので、こうした側面からもテキストの作為性が読み取れた。

第三章では、作中の重要な記号となる「人間」を中心に、『人間失格』に対する新しい読解の可能性を探究する。この作品は中心部分である三つの手記の前後に、枠として「はしがき」と「あとがき」が配置されている。手記部分の葉蔵の「人間」観と枠の部分の役割の考察を通し、『人間失格』は、葉蔵という人物の生き方に対して、太宰自身の態度あるいは価値判断が見えない作品であり、むしろ読者の存在を重視する作品であることがわかった。

第四章では、「人間」に関する考察の成果に基づき、ヒューマニズムという角度から改めて『人間失格』を意味づけることを試みる。まず、昭和期ヒューマニズムの内実の変遷を検討する。また、『人間失格』が発表された直後における文壇のヒューマニズムに対する態度と『人間失格』に対する評価を考察する。最後に、テキストにおけるヒューマニズムと呼び得る要素を抽出し、読解のキーワードとしてヒューマニズムに注目する必然性を論じた。

以上のように、本稿では既成の読解への疑義（第一、二章）と新しい読解の探究（第三、四章）という構成で、「私小説」と「ヒューマニズム」という二つの系譜を中心に、『人間失格』について論じている。この作業によって、以下の三点の研究成果を得た。

第一に、太宰研究に対して、太宰の生涯を参照しつつ、戦後のメディアと文壇に触れ、また、太宰が活躍していた昭和期の歴史にも目配りしたことで、文学作品の精読のみに閉じるのではなく、思想史、社会史等歴史学の知見も参照することで、領域横断的に検証することがある程度達成されたと思われる。

第二に、ヒューマニズムについて論究した部分では、戦争を遂行するために大東亜共栄圏思想が誕生する根拠となったヒューマニズムにしても、戦後の民主主義を前提とするヒューマニズムにしても、先行研究を踏まえつつ、思想界の動向が文学に与えた影響を指摘した。

第三に、既成の読解に対して、テキストにおいて作中内外の読者の存在が強調されていることと、ヒューマニズムという新しい評価の観点から『人間失格』を意味づけた。